

いのち 生命のにぎわいとつながり

No. 87

令和7年9月

きのこの美味しい季節がやってきました。今号では、千葉県山林に生育する毒きのこについて、永久保存版というべき内容でお届けします！

千葉県の毒きのこ



テングタケ科のきのこ。上列左からテングタケ（有毒）、広義のドクツルタケ（猛毒）、シロオニタケ（有毒）。

下列左から広義のフクロツルタケ（猛毒）、コテングタケモドキ（有毒）、広義のタマゴタケ（食用）

秋はたくさんのきのこが発生します。きのこ狩りは楽しいものですが、一方で毒きのこによる中毒も全国で後を絶ちません。千葉県でみられる、気をつけておきたい毒きのこを紹介します。

CONTENTS

- 1 千葉県の毒きのこ 1
- 2 ナルトサワギクの防除活動 これまでとこれから 3
- 3 千葉県ミヤコタナゴ再導入・補強計画を策定しました 3
- 4 「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞 ～安房生物愛好会～ 4
- 5 千葉県の外来種（チュウゴクアミガサハゴロモ） 4

◎日本の毒きのこ

日本で報告されている4,000～5,000種のきのこのうち、約200種が毒きのこといわれています。ひとえに毒きのこといっても、分類学的な位置や毒成分は様々なので、毒きのこを一目で見分ける方法はありません。地味な色のきのこは食べられる、ナスと一緒に煮れば食べられる、虫喰いのあるきのこは食べられる、などの迷信はすべて誤りです。一つ一つ、地道に名前を覚えることが大切です。

◎「つば」と「つぼ」をもつきのこにご用心

毒きのこといえば、赤い傘と白いいぼが特徴的な、ベニテングタケが思い浮かぶ方も多いかと思います。ベニテングタケは千葉県に分布しますが、色違いで茶色の傘をもつ毒きのこ、テングタケは普通に見られます。これらが属するテングタケ科のきのこは千葉県で約60種が知られています。その大半が有毒と考えられ、致命的な毒きのこも多く含まれています。ドクツルタケは純白で美しい見た目ながら猛毒をもち、「殺しの天使」の異名でも知られます。県外ですが近年も死亡事故が発生しています。

テングタケ科は樹木と共生する外生菌根菌のため、比較的豊かな森で見られます。柄の上部に膜質の構造（つば）と根もとに袋状の構造（つぼ）を有するきのこは、テングタケ類のことが多いです。大型で立派だからといって、みだりに食べぬよう心掛けたいものです。

◎最近千葉県で見られるようになった毒きのこ

地球温暖化に伴い、南方系の毒きのこが北上しています。オオシロカラカサタケは本来熱帯性のきのこですが、千葉県では1990年代に初めて確認され、現在では県内各地で見られます。初夏から秋に発生ピークがあり、博物館にも頻繁に問い合わせがきます。公園の芝生や畑などの腐植を好み、ときに輪を描くように大量に発生します。立派で美味しそうな外観ですが、もし食べると強い胃腸系症状に加えて高熱や悪寒などの症状を引き起こします。夏場に人里近くで白くて大型のきのこを見つけたら本種の可能性が高く、注意が必要です。

猛毒で有名なカエンタケも、かつては全国的に珍しいきのことしていましたが、千葉県では2000年頃から確認され、現在では秋になると普通に見られ

ます。赤い棍棒ないし指のような形状で、とても食欲の湧く外見ではありませんが、仮に食べると胃腸系の症状に加え、高熱や脱毛、小脳の萎縮などの重篤な症状を呈し、わずか1センチほどの誤食でも死に至るといわれています。毒成分には皮膚刺激性もあり、汁を皮膚につけると炎症が生じます。2020年代に全国的に異常発生し、奇怪な外見も相まってメディアを賑わわせました。ナラ枯れという樹木病の枯死木付近に生えることが多く、ナラ枯れとの関連も指摘されています。



オオシロカラカサタケ（乾燥標本）。円内は傘裏のひだ



カエンタケ

◎きのこで中毒しないために

紹介したもの以外にも、多くのきのこが毒をもっています。かつて食用や食毒不明とされた種でも、毒成分が検出されたり、中毒事例が起こったことで

毒きのこに転じることもあります。名前を調べるときはできるだけ最新の図鑑を参照するとともに、少しでも同定に自信のないきのこは決して食べないことが大切です。

行楽シーズンは自然の中に出かける機会も増えるかと思えます。名前のわからないきのこを見かけたら、食欲はちょっと我慢して、不思議な生態や色、形などに目を向けてみるのも一興かもしれません。

(栃原 行人 千葉県立中央博物館)

ナルトサワギクの防除活動 これまでとこれから

ナルトサワギクは、アフリカのマダガスカル島原産で、1970年代に緑化用種子に混入して日本に侵入したとされています。大株になって繁茂し、在来種に悪影響を及ぼすほか、毒があるため草食獣が食べると中毒を起こすことなどにより、特定外来生物に指定されています。また、多年草で、種子を大量に作るため、地上部を除去した際に土中に種子や根が残っていると、再繁茂してしまいます。そのため、個体数を減らすには、年間に複数回、複数年にわたり駆除作業を続けなくてはなりません。そこで、防除には地域での理解や対策への協力、連携があることが望まれます。

これまで千葉県内では、本種が初確認されて以来、様々な主体が連携して防除活動に取り組んできました。ここでは、2つの事例を紹介いたします。

1つ目は安房地域の事例です。2007年に市民団体である安房生物愛好会の会員が、館山市で本種を県内で初確認し、2010年から本格的な防除を開始しています。当初は安房生物愛好会、市役所、千葉県立中央博物館、生物多様性センター、多数のボランティアが協力し、大規模な駆除を実施しました。その後、環境省により外来生物法に基づく防除の認定を受けた安房生物愛好会が中心となり、現在も駆除を継続しています。



安房地域における駆除活動（2010年）

安房生物愛好会の会誌に掲載された駆除量や地点を確認すると、駆除された量も2010年の駆除大会では10トン以上、2015年には682kgだったものが、2018年には177kg、2020年には51kg、2023年には0.5kgと、根絶に近づいています。これは地域の市民の力を主として特定外来生物の防除を達成しつつある、全国的にも稀有な、素晴らしい取り組みの事例といえます。

2つ目は、茂原市の茂原工業団地の事例です。茂原市では2011年までに本種が確認され、2012年から千葉県立中央博物館（博物館ボランティアも含む）、市役所、生物多様性センターが協力し、防除活動を続けています。その結果、状況は大幅に改善していますが、現在（2025年6月）でも、小さな繁茂や実生が確認されています。工業団地は物流が盛んなため、車両への種子の付着による分布拡大を防ぐ観点からも、今後も防除活動を継続する必要があります。



茂原工業団地における駆除活動（2024年）

これら2つの事例とも、すでに10年以上にわたり活動し、成果をあげています。これまで駆除に参加された沢山の方々には、本当に頭が下がる思いです。一方で、これだけの時間と労力をかけて、まだ根絶しきれていないことも事実です。外来種対策は、長期戦、持久戦であり、これからも続きます。お住まいの地域での防除作業に、今からでも関心を持ち、理解を深めていただければ幸いです。

(下稲葉 さやか 千葉県生物多様性センター)

千葉県ミヤコタナゴ再導入・補強計画を策定しました

千葉県に生息している淡水魚類の1種であるミヤコタナゴは、文化財保護法で天然記念物、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されています。

本種は、かつては関東広域に分布していましたが、生息環境の悪化などによって数を減らし、現在は千葉県と栃木県の一部にしか生息していません。県内

の生息地でも近年捕獲されていない地域やごく少数しか捕獲されていない地域もあり、生息状況は安定していません。

このような状況から、絶滅を避けるために関係飼育施設でミヤコタナゴの飼育・繁殖を行う生息域外保全を実施しております。

飼育施設では個体数が減少している個体群や野外で絶滅している個体群も飼育しているため、これらの個体群を野外へ再導入・補強する際の実施方法等の基準を定めた千葉県ミヤコタナゴ再導入・補強計画を策定しました。

策定した千葉県ミヤコタナゴ再導入・補強計画は千葉県生物多様性センターホームページ

<https://www.bdcchiba.jp/miyakotanago>

で公開しています。

(佐藤 哲也 千葉県生物多様性センター)



ミヤコタナゴのみ

「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞 ～安房生物愛好会～

令和7年4月28日、令和7年度『「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰』の受賞者が発表されました。安房生物愛好会が「自然ふれあい部門」で表彰され、同5月14日に表彰式が執り行われました。

安房生物愛好会は、昭和39年1月に設立され、地域に根差した自然観察団体として活発に活動してきました。今回の受賞にあたっては、多くの市民が参加している毎月の例会（観察会）の実施などによる、長年にわたる環境教育への尽力が評価されました。

この表彰は、自然環境の保全に関する顕著な功績があった個人や団体に対して、その功績をたたえとともに、自然環境の保全について国民の認識を深めることを目的に、平成11年度から行われています。

表彰をご紹介するとともに、心よりお祝い申し上げます。(下稲葉 さやか 千葉県生物多様性センター)

千葉県の外来種

チュウゴクアミガサハゴロモ



左・チュウゴクアミガサハゴロモ、右・アミガサハゴロモ

チュウゴクアミガサハゴロモ *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977) は、カメムシ目ハゴロモ科に属する、中国を原産とする10mmほどの昆虫です。千葉県では2023年に印西市で初めて確認され、その後、千葉市、袖ケ浦市、君津市、成田市で記録されています。昨年頃から急速に分布を拡大し、県内に限らず各地で報告が増えています。生物多様性センターが所在する千葉市の青葉の森公園でも、多数の個体を観察することができます。

本種は幅広い植物に寄生し、原産国や韓国などの移入地では果樹類や街路樹の害虫として知られています。成虫・幼虫ともに植物の汁を吸い、その排泄物によってすす病を引き起こす可能性があります。さらに、成虫は枝の樹皮を剥いで産卵し、枝を枯死させる場合があります。千葉県では2024年7月16日、ブルーベリーやアメリカテマリシモツケで発生と被害が確認され、病害虫発生予察特殊報が発表されました。近隣都県でも植木や果樹で同様の報告があります。

チュウゴクアミガサハゴロモは在来種のアミガサハゴロモ *Pochazia albomaculata* (Uhler, 1896) に似ていますが、1. 翅の色が褐色（在来種は緑色を帯びる）、2. 前翅前縁の白斑が三角形（在来種は角の丸い四角形で近くに黒斑あり）といった特徴で見分けることができます（図を参照）。

本種に使用できる薬剤は限られており、当面は手作業での捕殺など物理的防除が必要です。アミガサハゴロモと比較すると都市部の緑地などの人工的な環境を好む傾向があることが知られており、今後も分布や被害の動向を注視する必要があります。

(樽 宗一郎 千葉県立中央博物館)



生物多様性ちばニュースレター No.87 令和7年9月30日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。